

概要報告

実施期日	8月2日(火)
部会名	中学校 社会部会

テーマ 『思考を深め合う授業を目指して』

提案概要

「どうしたら社会科で学んだことが社会に出て、よりよく生きるための力となっていくか。」社会科教育の根底にあるこの課題に向き合ったのが本実践である。実践校では3年間校内研究を通して「学びのプラン」を策定し、話の聴き方、話し方の「スキル表」を各教室に掲示するなど、3年間を見通したスキル学習を積み上げてきた。

本実践は、第3学年で「農業問題」「労働問題」「少子高齢化」のテーマについて、グループでプレゼンテーションを行ったことを基に提案された。習得した知識やスキルを活用し、他者の考えとの比較や検討を通して自ら思考し、判断し、表現する機会を与えることをねらいとした実践である。

3年間の研究実践の一番の成果は、学校全体に「学びあい」の風土ができたことである。さらに、様々な場面で「なぜ」「どうして」と考えるようになり、生徒が学習に対して主体的に取り組むようになったという点においても効果があった。今後は、相手の意見に対して自分の意見を照らし合わせて聴こうとする力をつけていくことや、生徒自ら資料を作成する能力をつけるための指導が求められていくことになる。

質疑概要

- Q 「農業問題」「労働問題」は議論するにあたって多くの基礎知識が必要となるが、事前にどのような指導を行ったか。
- A 教科書で一通り学び、新聞等を使って現在の状況を伝えるなどした。
- Q パワーポイントを使うにあたって、他教科の授業と使用教室や使用機材等が重なることはなかったか。
- A 技術科や教務と相談しながら調整した。
- Q ICTを活用した授業には、準備から発表までどれくらいの時間がかかったか。
- A 準備に4時間、発表に3時間かかった。パワーポイントは2枚以内、字数も少なくするよう生徒に指導した。
- Q この活動をどう評価して数値化し、評定につなげるか。
- A 「思考・判断・表現」の評価を数値化している。パワーポイントの内容は、資料作成の能力として評価した。概ね、全体の30%位をこの素材で評価し、テストは30%、残りの40%は他の提出物等で評価した。

研究協議概要

全体を8つのグループに分けて、「思考を深める授業づくり」のための「①課題の設定」「②教師のかかわり方」「③発問の工夫」「④言語活動を充実させるための工夫」について、グループ協議を行った。協議において主に話題になったことについて、各グループより報告してもらった。以下各グループの発表内容である。

●授業計画や目標を細かく提示して、今何を学ぶために何をしようとしているのかを生徒が一目で分かるようにする。できる限り具体的で分かりやすい言葉で発問し、生徒の発言に対しては必ずリアクションをするなど、安心して発言できる雰囲気をつくる。また、生徒にとって新鮮なネタを取り上げるなどの工夫をするとよいが、授業時間の確保が課題である。

●教師のかかわり方はファシリテーターに徹することが必要。できれば全教科を通して生徒にもその役割が担えるよう育成することが理想である。生徒には自分の考えをまとめる時間が必要で、その時間に、支援を要する生徒に教師が個別にかかわる必要がある。

●思考を深めるためには生徒の発言の機会を増やすことが必要。ニュースや地域の話題をテーマにすると生徒は話し合いやすい。生徒の話合いの途中に「中間発表」を設けると全体の話合いが効果的に進んでいく。また、生徒が考えをまとめるための手立てとして、まずテーマに関する断片的な知識を書き出させてそれを文章化させるといった工夫をした。また、それらを「イメージマップ」にまとめて提示するなどの支援も有効であった。

●授業時間の確保が重要である。評価は話合いの様子「見取り」だけでは客観的な評価につなげるのが難しいので、ワークシートの記述から評価するという方法もある。しかし、何を規準とするかが難しい。

- 生徒に「見させる」（授業のテーマを提示する、写真を提示する等）「話させる」（発問の語尾を工夫することによって生徒が活発に発言するようになった）「一人で学ばせる」（教科書をしっかり読むことによって家庭学習につなげる）ことを意識して授業づくりを行った。
- 座席を決めたり、話し合いが行き詰まったりした時に教師のかかわりが必要となる。課題を考えさせるために、教科書の通説にしばられない、生徒の思考を揺さぶる工夫された発問や課題設定が必要だと感じている。
- 「モノカルチャー経済の学習のあとに、そのデメリットをあげさせる」、「3分で生徒が授業を行う」等で生徒に主体的に考えさせ、意欲を引き出した。「思考を深めている生徒」とはどんな生徒か、その生徒像をしっかりとっていないと、真の力を伸ばすことにつながらない。
- 課題設定には生徒が身近に感じられるテーマが必要なため、地域教材を活用している。「あなたがその立場だったら」という発問によって課題を身近にとらえさせる工夫ができる。また、正解のない問いを投げかけることによって多様な考えを引き出したり、理由をしっかりと述べさせることによって、生徒の思考を活発にしたりすることができる。

まとめ概要

研究協議では、社会科教員が生徒と向き合う中で実践してきた授業づくりの工夫等をたくさん共有することができた。どの実践にも「生徒が生き生きと学び、将来にわたって豊かな社会生活を送って欲しい」という教師の願いが込められていた。

主権者教育が叫ばれる中、日本人の若い世代は、社会の一員として積極的に新たな社会をつくっていかうという意識が低いと言われている。中教審企画特別部会から出された「論点整理」の中には、「中学校・高校では、幼児期や小学校低学年で身に付けた資質・能力を踏まえてそれを育成していくことが重要である」と示されている。異校種間の交流も今後益々重要性を帯びてくる。また、自ら情報をキャッチし、自分の意見をもって行動していかうとする生徒の育成のために、社会科においても3年間の積み上げを意識した指導が求められるであろう。今回の提案は、生徒が身に付けた「学びあいの資質」をさらに伸ばすためのスキル学習を大切にした実践研究であった。

アメリカの著名な教育学者によると、現代のアメリカの子どもたちの65%が大学卒業時に今はない職業につくという。少なくとも、日本においても、変化が激しい社会に対応していける人材の育成が、学校教育の中で求められるだろう。

私たち教師は、生徒にとって新たな発見や感動のある充実した授業を目指していくべきである。教師から投げかけられた発問のみが学びの出発点となるのではなく、生徒自身の中で自然に沸き起こる疑問が学びの出発点となるよう働きかけていくことである。また、私たち教師が授業づくりをしていくうえで欠かせないのは、生徒の思考がどこに向かっているのか、またどこでつまづいているのかなどの内面の実態把握に努めていくことである。生徒一人ひとりを丁寧に見取りながら、主体的な学びの刺激となる授業をつくっていくことの重要性を改めて認識できた研究会となった。